

学会報告

「第3回国際トルコ言語集会 1996年」に参加して

アンカラ, 9月23日から27日

小田 壽典

1. はじめに

「第3回国際トルコ言語集会 1996年」はアンカラのトルコ言語協会(Türk Dil Kurumu)で行われた。この協会はトルコ共和国政府機関の「アタテュルク文化・言語と歴史高等機構」の一つであり、協会長のアフメト・B.エルジラスン教授の名において案内があった¹⁾エルジラスン教授の開会の挨拶によると²⁾1982年の憲法をもってトルコ言語協会は他の3組織体と同じく上記機構に編入された。そして1988年と1992年に続いて第3回目の集会である。私は今度初めて参加することになった。同協会は、さかのぼれば、1932年に初代大統領アタテ

ュルクによって創設された。すでにアラビア文字からラテン文字への改革に成功した(1928)アタテュルクは、トルコ歴史協会(1930)について、トルコ言語協会をつくりドルマバフチェ宮殿に最初のトルコ言語集会を招集したのが、その年であった³⁾

トルコ共和国政府の建国精神にもとづく国策的性格のはっきりした集会であり、そのようなプログラムである。因みに私は国外交流会員として協会の出版物を無償でいただいております、今回の集会では宿泊費のほか、かなりの交通費の支援を受けたことにトルコ政府当局に深甚の感謝を申し上げたい。言語が優れて国家ないし民族を構成する人々の帰属意識をたかめることは疑いないが、それだけではなくトルコ語の独自性

1) 参加の有無と報告標題(1月31日付),報告要旨1枚の提出(5月20日付)そして宿泊所と受付日時(7月22日付)の案内によって私は準備をすすめた。

2) トルコ言語協会(TDK)の雑誌『トルコ語』(TÜRK DİLİ, Dil ve Edebiyat Dergisi),538(1996.10)には、「第3回国際トルコ言語集会 1996年」が開催されたこと及びプログラムのほか、開会式の大統領メッセージ、国務大臣、機構の総裁と協会長の挨拶が掲載されている。それによる。

3) アタテュルク文化・言語と歴史高等機構の管理局『案内パンフレット』アンカラ1987(Atatürk Kültür, Dil ve Tarih Yüksek Kurumu Başkanlığı, Tanıtma Broşürü, Ankara 1987):7-8。「アタテュルク文化・言語と歴史高等機構」の案内パンフレット(アンカラ1987)によれば、次のように紹介されている。この機構は、1982年11月7日の日付で採択された憲法の第134条と1983年8月11日の日付で採択された2876号の「アタテュルク文化・言語と歴史高等機構法」の第2項の要請によって、アタテュルク思想、アタテュルクの基本と改革、トルコの文化、トルコの歴史、トルコの言語を学術的方法による研究調査、紹介、広報、出版する目的で、アタテュルクの精神的庇護において、大統領の監督と援助において、総理府に所属し、アタテュルク研究センター、トルコ言語協会、トルコ歴史協会、アタテュルク文化センターから構成される、完全な法人格を有する一機構である。

「アタテュルク文化・言語と歴史高等機構」のもとで毎年各組織体が国際会議を開催し、今年は4年目ごとのトルコ言語協会の順番となった。なお、このパンフレットには最初の交流会員として日本からは、服部四郎、柴田武と山田信夫の諸教授が名を連ねる。

に対して積極的に取り組んでいる。

さて集会の概略をみると、初日、9月23日(月曜日)、朝食後(8時)に宿舎から全員バスで、アタテュルク廟に向かった⁴⁾アンカラ市内の中心部の背後にひろがる広大な丘陵地に大建造物がたつ。三軍の儀仗兵の先導により国務大臣ウシュライ・サイグン女史が花輪をアタテュルクの墓前に捧げた。記念写真のあと、総勢120名ほどは集会場のカヴァクルデレ地区のトルコ言語協会に到着した。

そして23日午前の開会式の次第は、トルコ言語協会長、アタテュルク文化・言語と歴史高等機構の総裁、国務大臣サイグン女史、各開会の辞、大統領のメッセージ朗読、トルコ言語学への貢献者および貢献機関の表彰、開会講演。午後はトルコ言語学に関する一般的課題の報告であった。翌日24日(火曜日)から27日(金曜日)まで3分科会にわかれて報告が行われた。プログラムの上では、トルコ国内から73、国外から102の発表者であったが、実際には128人の参加となったことが閉会式で述べられた。さらに報告書の出版が約束された。研究報告は各人20分あて、私の聴講した範囲内ではすべてトルコ語によるものであった。しばしば、質疑応答や報告の延長にもこだわらず、活発な議論も展開された。内容はまったく学術的な事柄に終始し、各自の自由な専門的課題を自由に発表するものであった。ここでは、そのような内容を詮索するよりはむしろ、この大会を通じて

感じられた二三のトピックスを話題にすることが適切かと思う⁵⁾

2. ラテン文字化

9月26日(木曜日)午前中は、言語記念日の祝賀演説にあてられた。1932年にはじめてアタテュルクの提唱によってトルコ言語集会が開催されたのがこの日であった。協会長のエルジラスン教授が議定書を読み上げるなかで、我々参加者への呼びかけはこの大会の性質をよく著わしているようにみえた。まず「我々の立場と異なりトルコ人ではないのに、トルコの言語文化を研究し、世界に大きな寄与をなして、我々に対して援助をされている方々」、次に「東はヤクート⁶⁾からバルカン半島にいたるトルコ語を共通言語としている方々」、そして「トルコ国内(Türkiye)からここに参集されている方々」と呼びかけた。プログラムに付録された国別の出席予定者は24カ国に及ぶが、旧ソ連圏ほか国外出席者の70%以上が日常トルコ系の言葉を話している人びとのように見受けられる⁷⁾。サイグン国務大臣の開会演説にも⁸⁾「今年は集会にキルギズスタン、カザフスタン、ウズベキスタン、テュルクメニスタン、アゼルバイジャンからの傍ら、ロシアからのトルコ・タタル族の多数」が参加したことを歓迎する。ますますの近づきと共通の言語・文字を実現していくための支援を惜しまないことを強調した。スレイマン・デミレル大統領のメッセージにも⁹⁾

4) トルコ共和国の建国者であるムスタファ・ケマル(1881-1938)はアタテュルク(=国父)の称号をえて(1934)、いまでも彼の政治と精神は国家理念として生きている。

5) プログラムの日程表を翻訳し、私の聴講した分のみ注記する。別表2参照。

6) 東シベリアのトルコ系の人々。

7) プログラムの出席予定者国別表を翻訳する。実際の発表者は128人。別表1参照。

8) 『トルコ語』同上:365-366。

9) 『トルコ語』同上:363。

「アゼリー¹⁰⁾」,テュルクメニスタンとウズベキスタンの,ラテン文字採用の決定を喜び,興奮して歓迎する.近い将来成功裏に完了し,他のトルコ語を話す兄弟たちに新風の源となることを希望する」と述べた.かつての汎トルコ主義を思い起こさせるが,しかし一方,プログラムにはイスラム派(pro-Islamic)の首相,エルバカン教授の出席も期待された.しかし実現はしなかった.¹¹⁾このところ国内政治は強くイスラム主義的傾向に敏感となる一方,新聞論調も揺れが大きい.9月30日朝,私がイスタンブルを離れたとき機中の英字紙,デイリー・ニュースには,“Demirel underscores importance of secularism and democracy”の見出しのもとに¹²⁾「宗教的信念が悪用されるならば,決して平和も調和もありえない」とデミレル大統領の記者への談話が載っていた.かつてアタテュルクが提唱した政治原則の一つは俗権主義(secularism),すなわち政教分離の原則であった.ラテン文字への改革もまた俗権主義への道にあった.¹³⁾ただ俗権主義が揺らぎはじめていることも事実である.ともかくも旧ソ連圏の3カ国がキリル文字からラテン文字へ踏み切ったことはトルコ共和国にとって大きな意味をもつにちがいない.今回旧ソ連圏のトルコ系の国々から大勢が参加したことの政治的意味はさらに大きいのかもしれない.一昨年のPIAC報告

書によれば,モスクワのV. M. アルパトフによる「トルコ諸語のためのアルファベット選択問題:歴史と現在」と題する論説がある.¹⁴⁾オスマン朝トルコ帝国の崩壊後,1920年代にトルコ系諸国がアラビア文字からラテン文字への道を選択しはじめていた.そしてトルコ共和国だけがそれを実現したが,ソ連下のトルコ系諸国はスターリン体制のなかでロシア文字への統一に向かい,1935年から1941年にキリル・アルファベットに移行したと述べる.ソ連の崩壊による政治的文化的動向は,むかしの模索を再び呼び覚ましたのである.

3. トルコ学へ謝罪の旧ソ連

ロシアのフィヨードル・アシュニン教授による開会講演は「ソヴィエト東方学の歴史から:処罰されたトルコ学」¹⁵⁾と題して行われた.衝撃的であった.ロシア革命後のトルコ系民族史のなかでレーニン時代には比較的ソヴィエト下の民族的自立が謳歌され,詩人・文学者や思想家が輩出し,民衆に人気の的となった.スターリン時代に入り,一転して弾圧の犠牲者となったことはまことに痛ましい.具体的事例には犠牲者の名前を含み,会場内は緊張が走った.事例はこのあたりでと話が閉じられようとする,すかさず,私の隣あたりからカザフスタン

10) アゼルバイジャン.

11) 開会のプログラムには,4番目に国務大臣のあと,「総理大臣 Dr. Necmettin Erbakan 教授の辞(ご出席ご希望あれば)」とあり,実際には大統領のメッセージに代わった.

12) 新聞“turkish daily news,”A5(Monday, Sept. 30, '96)

13) 参照:永田雄三「トルコの近代化と文字」『歴史教育』18(1970)-7:32-38.

14) Vladimir M. Alpatov (Moscow), The Problem of Choice of Alphabets for the Turkic Languages: History and the Present, *Proceedings of the 38th Permanent International Altaistic Conference (PIAC)*, Kawasaki, Japan: August 7-12, 1995. Harrassowitz Verlag 1996: 1-4.

15) Açılış Bildirisi: Prof. Dr. Fyodor AŞNİN (Rusya), “Sovyet Şarkiyat Bilimi Tarihinden: Cezalandırılan Türkoloji.”

もまだあると声がかかった。では、といってしばらく読み上げが続いた。時計の針が止まったような静寂のなかで、高齢のアシュニン教授は嘆息し、ワシリエフ博士が補助に立って講演はロシア語にかわり、トルコ語に通訳された。なお27日(最終日)の第3会場では午後の始まりに、番外の女性講演者によってとくにカザン・タタルに関して犠牲者に対する追悼講演が補足された。40歳を越えて生きのびた詩人や文学者はたいへん少なかったという。

4. 言語政策

ところで、偶然の引用といわざるをえないが、近刊の雑誌『季刊民族学』(78号:1996.10.20. 国立民族博物館 監修)の末尾ページにぎっしり横文字が詰まっている。よくみると日本語のローマ字転写である。それは、梅棹忠夫と山根一眞^{かずま}の公開対談「情報化時代の日本語 デジタル化の時代に日本語は生き残れるか」の一部分であった。トルコ語は、モンゴル語などと並ぶアルタイ諸語の一つで、文章の構造は日本語もこれに似る。我々にはトルコ語はやさしい言語である。トルコではローマ字といわずに、ラテンというのでそれを使いたい。今回久しぶりにトルコへ旅行するにあたって、少しく高齢となり、まったくトルコ語を知らない学生の、私の娘を同伴させた。アンカラの街角の書店にトルコ語とラテン化した日本語の辞書を見つけて購入した。ところが少し面倒なことになった。なぜならラテン化した日本語の意味を特定できない。英単語でも付いていると良いのにというのである。

トルコ語の表記は、長い変遷の歴史をも

つ。大筋、中央アジアでは突厥^{とっくつ}文字、ウイグル文字、さらにアラビア文字に変わり、旧ソ連圏ではキリル文字となった。このたび3カ国はラテン化をうち出した。トルコではオスマン朝時代のアラビア文字からラテン文字(1928)となっていらい、それに伴う独自性を追求してきたといつてよい。それがトルコ言語協会である。トルコ語純粋化運動ともいわれ、国粋主義的性格がややもすると強調されたが、むしろトルコ語の生き残る道であったと評価すべきであろう。オスマン時代はトルコ語文語に多くのアラビア・ペルシア語要素が、いわば文化として移入された。日本語もそうであるが、膠着語といわれる。名詞・形容詞や動詞ばかりか修飾・被修飾の成句にいたるまで、比較的ゆるやかに接合して構文(syntax)をつくるので、外来要素を採り入れやすい。たとえば、ジェザーラン(cezalan-) <罰せられる>は、ジェザー(ceza) <罰>(アラビア語源)とラン(+lan-) <せられる>(動詞化接辞)の組み合わせである。日本語なら<する>という動詞を漢語要素につけ加えて表現するのと同じである。トルコにおけるラテン化は、アラビア語要素を薄めるとともにイスラムの呪縛からの脱皮にも与って力があつたが、トルコ人自身はトルコ古典や方言の収集に目を向けるようになり一種のトルコ語ルネッサンスの契機となった。オスマン朝のアラビア語要素は、日本に置き換えると、江戸時代の漢語文化である。明治維新になって新しい欧米文化を導入すると、それを漢語によって咀嚼^{もじやく}した。新しい文化をともなって外来単語がはいってくる。まさしくカルチャーに「文化」という漢(訳)語をつくり出したようにである。日本語はカタカナという手段によって新しい外

来用語を定着させている。これに対してラテン文字を使うトルコでは音韻体系の異なる欧米語の流用はかえって違和感を際立たせるにちがいない。トルコ言語協会の広報月刊誌である『トルコ語』(言語と文学の雑誌)は1994年3月号から毎回のように「外来単語への対応(語)」¹⁶⁾と題して具体的提案が掲載される。たとえば、537号(1996.9)の274ページには、laptopほか対象になっている。翻訳すると以下のようなものである。

laptop 英語で lab[lap] と top の単語から構成されるこのことばは、小さい、携帯できる、どの環境でも使用できる、(という)一種のコンピュータの名である。我々の委員会ではこの単語に対してディズ・ウステュ(diz üstü)ということばがふさわしいと合意した。もともとディズ・ウステュ・ビルギサヤル(diz üstü bilgisayar)というこの熟語はときとともに、ただディズ・ウステュといってもっぱらコンピュータ(bilgisayar)の種類を解せしめるものとして広まるだろうと期待される。¹⁷⁾

ice-tea(英語 iced tea)独自の正書法によって我々の言語でも使用されるこのことばは、<冷やして出される一種のお茶>の意味である。委員会ではこの言葉のためにブズル・チャイ(buzlu çay)の語がふさわしい対応(語)であると合意した。¹⁸⁾

その他、squash(スカッシュ・テニス)はドウヴァル・トプ(duvar topu)<壁ボール>、eyeliner(化粧)はギョズ・カレミ(göz kalemi)<目の筆墨>などが挙げられる。

5. 出会いと世情

ちょうど20年前(1976)になるが、イスタンブール大学で国際会議が開かれたとき、私の原稿を、ユーゴスラヴィアのトルコ語雑誌、Çevren に掲載してくれたニメトラーフ・ハフィズ(Nimetullah Hafiz)氏は、その後ずっと雑誌を送ってくれ、1992年の90-92合併号まで続いた。紛争が激化すると雑誌はとだえ、たいへん心配した。今回再会できたことはまことに奇遇であり抱き合っただけよるこんだ。雑誌は資金難で中断したという。かれの長兄がイスタンブール工科大学の教授職を退任してイスタンブールに在住する。一タ、ニメトラーフ氏とそこで旧交をあたためた。また1985年のイスタンブール大学の学会では、キルギズスタンからの女性研究者が飛び入りで発表した。¹⁹⁾その風貌が似ているので記憶がよみがえってきた。名刺には Prof. Dr. Byubina O. Oruzbayeva, キルギズ共和国科学アカデミー会員とあって間違いなかった。その教え子の若い夫妻もキルギズスタンから来ていて、本国に子供を残してしばらく勉強したいと話してくれた。中央アジアの人々は我々と顔の輪郭がよく似る。アンカラの宿舎は、首都教員宿泊所といい、十階建ての公共建造物であった。たまたまエレベータの前で我々に似る女性がいた。トルコ語で話しかけたが返事がな

16) TDK: Yabancı Kelimelere Karşılıklar. (注2: 参照)

17) 因みに diz は <ひざ>、üstü は <うえ>、つまり <ひざうえ> の意味、またコンピュータ(bilgisayar) bilgi <知識、情報>、sayar <計算するもの> である。

18) 因みに buzlu çay は <氷入り茶> の意味。

19) そのときトルコのある学者がいまの講演を理解できた方はいるか、との問いに40~50人いた聴衆のなかから1人だけ手をあげた者がいた。方言といつてもたいへん違うのだと印象をもったので、記憶に残ったのである。

かった。翌日また顔を合わせると英語で話しかけてきた。カザフスタンからきた教員志望で数カ月研修をうけに、はじめて外国にきたという。英語は本国で勉強してきたらしい。

この宿舎、言語協会ほか私の出入りした公共物はすべて空港の金属探知器と同じような通過枠が備えられ、警備員が常駐していた。テロに対する警戒は異常にみえた²⁰⁾。イスタンブルの郊外に近いところ「白いセンター(Ak Merkez)」と呼ばれる白亜の高層ショッピング・ビルに入った。入り口では手持ち金属探知器で1人ひとりボディチェックをうけた。さきほど触れたイスタンブル工科大学元教授が案内してくれた。いまトルコはたいへん発展しつつある²¹⁾。しかし軍隊、保安隊、警察官、警備員そしてお巡りさんなど、治安維持のための国家支出が多く、それをまかなう経済が追いつかない。つまりインフレがすすんでいるという。いま1970年の法律にもとづく紙幣が行われているが、1980年には1トルリラ = 2.34円、1993年には1トルリラ = 0.01円、現在1ドル = 90,000リラ前後だから1トルリラは0.0012円となる。3年で10倍ほどのインフレ状態である。最高額紙幣は、1百万リラ = 1200円にあたる。タクシーの初乗りは45,000リラ(54円)で、市内をかなり走っても500~600円でおさまる。もうなつかしいドルムツシュ(乗合タクシー)は見かけなかった。ところがイスタンブルの観光地で拾ったタクシーは初めから300,000リラである。変ではないかという、リセットして通常にもどした。

メーターが簡単に変わるのには驚いた。アンカラでは一夜、アイランジュ国際ライオンズクラブの会合に参加した。50人ほどの集まりだったが、この日は駐トルコ・ポーランド大使が経済アタッシュと出席し、流暢なトルコ語で30分以上講演されトルコ企業家の投資を期待するものだった。それよりさき開会を待つあいだ、そのホテルのロビーにいた。入り口近く、私の座席の反対側へお巡りさんと名乗る男性がきた。正式な公務員ではないらしい。そのうちバス一台のツアーが到着した。ツアーの若者のひとりが坐った。トルコ語はほとんど通じなかったが、クリミアのクバンから船で黒海岸のトラブゾンへ上陸しバスでここまで来たという。目的はマーケティングをかねた観光らしい。買い出し旅行である。

トルコの政情が安定していないことが、イスラム派政党の躍進によって注目を集めている。先に引用した9月30日のデイリー・ニューズ紙の前ページには福祉党の党首であるエルバカン首相が駐イラン・ナイジェリア大使と会談する写真が載り、野党に転じた祖国党のクルマズ前首相がエルバカン首相のリビア・ナイジェリア訪問計画を外交政策の異常な転換だと非難する記事が並んでいる。1995年12月の総選挙²²⁾で少数イスラム派の福祉党がわずかにも比較第1党(21.32%)となり、祖国党(19.66%)と正道党(19.20%)の中道・俗権主義セキュラリスムの主導権に動揺がでてきた。これは90%以上を占めるイスラム教徒民衆の、しかも低所得者層の政治的関心とソ連崩壊後の多極化のあらわれで

20) トルコ南東部にクルド人国家の独立をめざすゲリラ組織、クルド労働党(PKK)との紛争は先鋭化し日常的でさえある。両者の衝突で1984年来、2万人以上がたがいに殺害されている(上記『イリニューズ』: A4)。

21) GNPの伸び率は6.5%(『中東研究』1996-9, No. 418: 68)である一方、エネルギー不足が深刻。

22) 『中東研究』1996-1(No. 410)、トルコの総選挙: 18-19。

あろうか。3カ月してやっとできた第2党と第3党の連立政権は6月に倒れた。これまでアタテュルクの俗権主義を絶対として宗教組織を「宗務庁」として国家行政下におき、政治はモスクに入らず、軍部にイスラムをいれずを厳守してイスラムの政治的介入をタブーとしてきた。しかし第1党と第3党の連立によって、はじめてイスラム派党首のエルバカン政権が生まれた。欧米がイスラム原理主義を警戒する矢先、首相はイランから東南アジアのイスラム圏外交にでかけ、さらに西側の要注意国であるリビア訪問計画が問題化したのである。アンカラに目立つ建造物はアタテュルク廟とならんで、いまや壮大なコジャテペ・モスクである。金曜日の礼拝には厳重な警戒のもとに群衆が参集する。髪をスカーフで覆えば女

性も自由に出入りできるのは新しいやり方なのであろう。モスクとは直結しないが地階に大スーパーマーケットが展開されている。

滞在中の夕食は主催者の招待で、ビールやラク(蒸留酒)も自由だったが、実際に酒類を口にする人はごく少なくみえた。上記ライオンズの会食では初め遠慮してジュースと言った。よく眺めると多くの男女はラクを前においている。お前は酒を呑まぬのかというので、君たちこそ禁酒ではないかと問うと、今日は仕事だといって意に介さぬ風情であった。それで私も同調することにした。

さてチュワッシュ・ヤクートほかをのぞけば、旧ソ連の多数がムスリムであるトルコ系諸国は、トルコ共和国の政治的文化的動向と深くかかわっていくのであろうか。

別表1：研究報告者国別予定表

番号	国名	人数	番号	国名	人数
1.	トルコ共和国	73	19.	ルーマニア	3
2.	アメリカ	2	20.	ロシア	8
3.	ドイツ	2		バシクルデ ^イ スタン	3
4.	アゼルバイジャン	26		チュワッシュ	5
5.	ブルガリア	2		タタリスタン	10
6.	ゲルジア	1		ヤクート	1
7.	ウクライナ	1		(ロシア合計)	27
8.	イラク	2	21.	スロヴァキア	1
9.	イタリア	1	22.	テュルクメニスタン	7
10.	日本	1	23.	ユーゴスラビア	3
11.	カザフスタン	1	24.	ギリシア	1
12.	キルギスタン	3		総計	175
13.	ハンガリー	3			
14.	マケドニア	1			
15.	モンゴル	1			
16.	ルウェー	1			
17.	ウズベキスタン	10			
18.	ポーランド	2			

別表2：第3回トルコ言語集会 日程表

日付	9. 23 月	9. 24 火	9. 25 水	9. 26 木	9. 27 金
第1会場 サロン	A.M. 10:00-13:15 開会式	9:30-12:45 とくくつ 突厥	9:30-12:45 文法	9:30-12:45 記念講演	9:30-12:45 アゼリ
	P.M. 15:00-18:15 一般トルコ語	15:00-18:15 ウイグル	15:00-18:15 アルファベット 教育	15:00-18:15 キプチャク	15:00-18:15 チュルク
第2会場 図書館	A.M.	9:30-12:45 チュルク・ ヤクト	9:30-12:45 アトリア方言		9:30-12:45 トルコ語 全般
	P.M.	15:00-18:15 言語学・ 固有名詞学	15:00-18:15 言語の課題	15:00-18:15 タタル・ハシキルト キキズ 他	15:00-18:15 民俗学
第3会場 中二階	A.M.	9:30-12:45 新トルコ文学	9:30-12:45 カラハン・ ウイグル		9:30-12:45 トルコ語 全般
	P.M.	15:00-18:15 古トルコ文学	15:00-18:15 チャガタイ・ ウスヘク	15:00-18:15 新トルコ文学	15:00-18:15 外来語 交流

注：9月24日突厥について，Guzev, V.G.(ロシア)：「突厥文字の土着起源説の発展試論」，Vasilyev, D.D.(ロシア)：「突厥文字のユーラシア地域での広まり」，Sertkaya, O.F.(トルコ)：「ホイト・タミル(モンゴリア)の新出碑文」，Şükürlü, E.C.(アゼルバイジャン)：「アゼルバイジャンで新しく発見された突厥文字碑銘」，Ercilasun, B. 女史(トルコ)：「トルコにおけるオルホン碑文に関する最初期の諸情報」；ウイグルについては，Oda, J.(日本)：「観音経ウイグル写本の言語特徴」，Sadikov, Q.(ウスヘキスタン)：「(マニ教テキスト)マスタアニフ写本の分析等」，Ölmez, M.(トルコルージュエテ大学)：「シリア字書写の古ウイグル語一医薬書」，Kaya, C.(トルコイスタンブール大学)：「イスラム期のウイグル字作品ルスワン・シャートルハザの物語」，İnayet, A.(トルコエーゲ大学)：「トルコ語のなかの中国語彙について」等であった。他二三聴講したが省略する。